



Title	書評 : 永岡崇 『新宗教と総力戦—教祖以後を生きる』
Author(s)	五十嵐, 恵那
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 281-285
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55494">https://hdl.handle.net/11094/55494</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評：永岡崇『新宗教と総力戦——教祖以後を生きる』（五十嵐恵邦）

書評：永岡崇  
『新宗教と総力戦——教祖以後を生きる』  
名古屋大学出版会、二〇一五年

五十嵐 恵邦

本書で俎上にあげられるのは、天理教の二十世紀前半の歴史、特にその戦争協力へ至るまでの道のりである。著者・永岡崇が目指すのは、歴史的事象の客観的な叙述だけでなく、歴史的真実とはどのように構築され、また解釈されてきたのかを問う、自己省察度の高い批判的実践である。天理教、そして新宗教の歴史がこれまでどのように語られてきたのかを詳らかにした上で、歴史の持つ多様性を叙述するための方法論を打ち出そうとする。

この論考のなかで、まず、著者が「二重構造」論と呼ぶ言説が問題とされる。ここでいう二重構造とは、教祖の本来の教えと、それから逸脱してしまった教団の姿を対比し、前者に歴史的条件を越えた宗派の本当の姿を求める理論的枠組みを指す。天理教の歴史について言えば、中山みきの教えは本来、反権力的なものであったが、国家権力の圧力・介入によりその後の天理教団は誤った道を選んてしまったという図式である。

二重構造論の前提としてある、抵抗／協力という二項対立的な見方は、研究者の間でも広く共有されているが、大きな方法論的な問題をはらんでいる。それは、教祖の本意を理解することが最重要視され、そこからすべてが一元的に説明されてしまうという点である。つまり、社会、経済、政治といった複雑な条件のもとで、教祖の教えを自分たちのものにしていったその後の教団、信徒の動きは、誤った、二義的なものとされ、見えなくなってしまうのである。

スタンレイ・フィッシュの解釈共同体の概念を引きながら（301頁）、教団を信仰共同体として読み解くという永岡の方法論は、テキストの権威を内破した文学理論と重なり合う。教祖の教えに全てを収斂するのではなく、あくまでもそれがいかに読まれ、解釈されたかに重点を置くのである。読むという行為は、教義を——まさに直筆のテキストとして——生み出すという行為と同等に歴史的なものとなされる。そして、テキストは読むという行為によって、はじめてその意味を生み出すのである。

永岡は、解釈の共同体の「読む」行為を読み込むことで、その歴史的意味に改めて注目しようとする。以下、その実践を概観してみよう。

第一章は、教祖中山みきが一八八七年に亡くなった直後の移行期の歴史に注目する。教

祖の不在はすなわち、教団の存亡のかかった危機状況を生み出し、その先行きは必ずしもはっきりとしたものではなかったはずである。しかし、天理教の連続性をア priori に措定し、それを教祖の教えから一元的に説明してしまう本質論的な語りのなかでは、このような裂け目は、見えなくなってしまう。

そこで永岡は、教祖を失った教団が「親神共同体」をどのように「再構築」したかを前景化し、天理教の歴史の中でこれまで周縁的に扱われてきた、飯降伊蔵のはたした役割に光をあてる。みきの孫である中山真之亮が初代「真柱」として教団組織を支えたのに対して、飯降は「本席」として親神のことばを「おさしづ」として伝え、信仰の連続性を確保した。真之亮という「世襲の後継者」と、飯降という「霊能の後継者」は、「危機に際して互いの正当性を承認しあうことによって、共同体の消滅あるいは分裂の危機を乗り越えていくのである。」(87頁)

こうした親神を中心にした共同体の再構築のドラマは、伊蔵の身体的症状を通して表象された。伊蔵はみきの死後、病を得て身体が極度に衰弱した状態で、親神の本意を伝える「存命の理」を下している。その存命の理によれば、肉体的な死にもかかわらず、みきは信者たちを守る存在であり続ける。他方、伊蔵の衰弱、そして回復というサイクルは、当時の教団の存続の危機そして再構築へと向かう足取りと重なり合あう。伊蔵の身体はこの再構築のプロセスが信者たちに向けて演じられる場となっただけでなく、教団外部への橋渡しともなったのである。

教団外部とはすなわち、宗教的統制を強めつつあった国家権力であり、教祖以降の天理教は、このような外部的介入と妥協せざるを得なかった。それに対して、「教祖・中山みきは、死の直前まで国家権力との妥協を許すことはなかった。みきの神が“拒む神”であったとすれば、伊蔵の神は“妥協する神”だといえる。」(107頁) ここで指摘される「妥協」とは、もちろん二重構造論で措定されたような、本来の道から外れてしまった、誤った選択を意味するのではなく、国家権力の介入という厳しい条件のもとで、天理教を再び立ち上げていくための複雑な試行錯誤のプロセスである。みきの「拒む神」そして伊蔵の「妥協する神」は、異なる歴史的条件のもとで生み出されたと強調される。

第二章では、真之亮の孫である中山正善(1905-67)の戦前期の実践そして思想が読み解かれる。永岡は正善の世界観に、教祖・親神の権威を中心とした二重の同心円構造を見て取る(156頁)。まず中心の円の内側にあるのは、〈教祖＝親神〉の権威であり、そのような権威を代弁する正善でもある。

このような正善の立場を保障するのは、みきの直筆である「おふでさき」の書誌学的分析である。正善はおふでさきというテキストに、正偽という二元論的な枠を当てはめることで、様々に競合する解釈を超越する立場を築き上げる。つまり、書誌学という実証学的

な検証によって、テキストはその思想的な豊かさを奪われ、中山家そして正善の教団指導者としての正統性を裏打ちする遺物にされてしまった。テキストの解釈の正しさは、テキストが本物かどうかという問題に置き換えられてしまったのである。そして、正善こそがみきの書き残したテキストの正統性を見定める者であり、それによって彼自身の天理教指導者としての正統性も支えられる。

この中心の円の外側にあるのは、「根の国」=日本であり、さらにその外側に「枝先」=外国が広がっている。永岡は、この同心円構造を用いて、正善の書誌学的な「パフォーマンス」（142頁）と、彼の植民地的な態度とを、連続したものとして表現する。このモデルの中で伝道とは、中心の円の〈教祖=親神〉の権威から日本へ、そしてさらにその外側の外国へと向かって広がる啓蒙の運動である。そのうえで、正善が精力的に収集した外国についての古書・民俗学資料は、このような啓蒙のために必要な情報であったと解釈される。

永岡は「原典の書誌学的研究が必然的に帝国主義や国家主義へと帰結するなどといったいわけではない」（158頁）とクギを刺すが、この二項の関係については、もう少し詳しい分析が望まれる。例えば、正善の植民地的な態度と書誌学的視点を重ね合わせることも可能である。つまり、啓蒙されるべき他者は、書誌学的に整理・分析されるべきテキストのように見られたのであり、正しい他者の姿を発見するために様々な資料が探し求められたのではなかったのか。他者に関する知識は、他者との力関係を確認、そして固定するために必要とされたのであろう。

また逆に、みきの書き残したテキストへの正善の態度は、まさしく植民地的な態度であろう。テキストは発話することを許されず、正善という植民者によって語られねばならなかった。（まさに、みきはサブオルタンsubalternの位置に固定されたのである。）親神の教えと植民地文化は、彼の思想の中で意外な形で通底していたのかもしれない。これらは、さらに展開されるべき点であろう。

第三章の主題は、戦前期に国家主義そして植民地的な傾斜を強めていった天理教団の歴史である。教団は、おふでさき、そして同じく教祖自身の手で書かれた「みかぐらうた」といった原典の権威のもとに、それまで色濃く残っていた土俗的な要素を排除し、「国民教化」を公的な目標として掲げた。この時代の外部からの政治的な圧力は、被害者としての教団という戦後的な語りの前提となったが、永岡はそのような一元的な見方を真っ向から否定する。

総力戦体制に向かう政治的な状況は、逆に、天理教の教えを正統化するための好機でもあった。「淫祠邪教」として差別あるいは取り締まりの対象となってきた教団は、政府の政策を自らの教義として内面化していくとことで、日本の帝国主義とともに拡大、成長し

ていったのである。このような動きの一環として、一九三四年に、教団は満州国入植を開始している。天理教の国家主義的な転回は「革新」のスローガンのもとに推進されたが、それは決して戦時下に突然始まったものではなく、一九一〇年代から理論的な準備がなされていた。

天理教は、総力戦を機として、社会的な周縁から政治的中心に向かって、その立ち位置を変えたが、同時にその教えを「原典掘り下げ」のかけ声のもとに一元化し、教団組織も統合強化していった。

本書の天理教の教義を歴史化する作業は、〈ひのきしん〉について語られる第四章で最も具体的な形を与えられる。〈ひのきしん〉とは、「天理教信者の行う勤労奉仕」であるが（197頁）、教団の創生期から常に中心的な意味を与えられたわけではない。天理教が独立の教派として認められた一九〇八年から一九二〇年代にかけて、〈ひのきしん〉は、教団を社会的に有用足らしめるものとして再発見されたのである。しかしこの時期、一般の信者たちにとってはまだ抽象的な概念でしかなかったのであり、このような状況が急激に変わるの、やはり総力戦体制が築き上げられていく中である。

太平洋戦争期に入ると、「いざ・ひのきしん隊」が編成され、多数の信徒が銃後の支えとして動員されていった。その中でも、炭鉱での勤労は特に象徴的な意味を持っていた。それまでさげすまされてきた肉体労働を通してこそ崇高な目的が達成されるという逆転のなかに、差別的な扱いを受けてきた天理教が体制を支える側にまわったダイナミズムを見ることができる。

さらに、本書で指摘されている教義の象徴的な意味を考えれば次のようなことも言えよう。地中深く潜って石炭を掘り出すという作業こそは、原典掘り下げという運動のなかで生まれてきた日本＝根の国というパラダイムを完成させる身体的なパフォーマンスであった。ひのきしん隊が掘り出していたのは、天理教の正統性の根拠そのものであったはずだと。

第五章では、天理教を代表する知識人の一人、諸井慶徳の著作「ひのきしん叙説」を通して、アジア太平洋戦争を聖戦と位置付ける言説と、〈ひのきしん〉の思想との間に見られる類似性を呈示し、この類似性をより歴史的に分析する必要を訴える。この章は、終章の次に短い章であり、これからの探求のエリアを指摘するにとどまる。

日本の敗戦は、天理教の「復元」の時代の始まりでもあった。教団指導部は、「復元」の名の下に、原点に立ち戻り、教祖の教えのより正しい理解を目指したが、それは戦時期の活動との関係をあいまいにするものでもあった。（まさに「二重構造」論を地で行くものといえよう。）第六章で強調されるのは、戦争が終わったからといって、もともとの教えが、霧の晴れるようにその真の姿を表したわけではない点である。

書評：永岡崇『新宗教と総力戦——教祖以後を生きる』（五十嵐恵邦）

戦中にいざ・ひのきしん隊の活動を通して構築された天理教の総力戦体制は、戦後にもその影を落としたのであり、この枠組みを通さずには、戦後の天理教の歴史も十分には理解できない。必要とされているのは、「二重構造」論が強制するあれか／これかの二者択一の歴史ではなく、あれも／これも視界に入れることのできる複眼的な見かたである。

そして、この章の最後に、戦中から戦後初期にかけて、天理教が多くの信者を失ったことに注目する。教団が、国家目的に向けて統制されていくにつれて、信者たちの中にあった現世的、あるいは呪術的な救済への渴望に答えられなくなったという見立てがなされる。ここでは、従来の研究ではすくい上げられることのなかった、教団を離れていった人々にも関心が払われる。

終章の中で、本書の主題が確認される。それは、土俗的な信仰に根を張る天理教の教えと、国家的要請の複雑な相互関係のなかで、信徒たちがどのように教祖の教えを理解し、いかなる信仰の共同体を作り上げていったのかという極めて歴史的な探求である。

永岡はその中で、身体という様々な表象の錯綜するトポスを中心にすえ、多元的な歴史を書き上げたのであり、その過程で「二重構造」論という二元論を小気味よく粉碎して見せた。緻密な論理的構成によって展開されるこのような理論的实践は、新宗教研究者だけでなく、戦前・戦後の歴史に関心を持つ者にとっても、熟読する価値があるものである。

(いがらし よしくに バンダービルト大学教員)